

深川の産業 — 漁業と流通 —

江東区深川江戸資料館



食糧ビル正面（深川正米市場跡・佐賀1-8）

1 深川獺師町

隅田川沿岸、今の永代・佐賀付近は、江戸の初期には舌のように突き出た寄せ洲^{よせす}でした。このあたりを開拓して漁業を営む人が現れて、深川獺師町が成立します。

彼らは摂津や紀州など上方から移住してきた人々といわれ、寛永6年（1629）に幕府へ開拓を願い出て許され、代わりに幕府へ魚介類の献上と、將軍御成りの際の役船の調達^{おきな}が義務付けられ獺師町ハッ町が成立しました（通常、海の「りょうし」は「漁師」と書きますが、史料の中では深川の場合「獺師」と記されています）。

以後、深川獺師町は江戸湾、つまり「江戸前」漁業の一翼を担ったのです。富岡八幡宮例大祭の神輿連合渡御で、殿に登場する「深浜」の神輿は町内の枠を越えた、かつての獺師町の神輿です。

2 掘割りと流通

寛文・延宝の頃（1661～1681）、海上航路として西廻り航路・東廻り航路・南海路が成立し、集荷

市場としての大坂（物資の送り手）、消費市場としての江戸（物資の受け手）という位置付けが明確になり全国市場が形成されました。

ちょうどこの時期の深川は、本所とともに明暦の大火（1657年）後の江戸再開発により土地の開拓と都市化が進み、町場や寺社、旗本・御家人の屋敷が増加している時期でした。さらに、全国から江戸に運ばれてきた物資の集積地として機能するように、縦横に掘割りが作られたのです。

すでに天正18年（1590）に徳川家康が江戸へ入ってすぐに開削された小名木川のほかに、1630年代から40年代にかけて仙台堀が作られ、さらに1650年代後半から60年代にかけて、堅川・大横川・横十間川が本所奉行の徳山五兵衛・山崎四郎左兵衛門により開かれました。また、江東地域の流通が盛んになったのに伴い、寛文元年（1661）には小名木川の西側河口付近（隅田川との合流地点）にあった川船番所が、東側の河口（中川との合流地点）に移動して、物資や人の監察に当たることとなりました。

こうしたなかで、元禄14年（1701）の木場の成立は、物資集散の拠点としての深川の役割を決定付ける出来事でした。こののち、3百年近い木場の歴史が始まったのです（木場については「資料館ノート 第3号」で紹介）。

3 米と干鰯の流通

深川の間屋の中で、特徴的だったのが米と干鰯^{ほしか}の間屋です。米は江戸時代の年貢の代表であり、全国的な流通機構がありました。また干鰯は、鰯を干して肥料としたものです。さらに肥料とあわせて油分を灯油として販売していました。

(1) 米の流通

米の取り扱いは幕府や各藩が年貢米として徴収

したものが市場に出たものと、商人が産地から買
い集めて市場に出たものがあり、前者は札差や
御用達商人、各藩の蔵屋敷などが換金業務を行っ
ていました。ことに蔵前に集中していた札差商人
は、幕府の年貢米を旗本や御家人といった幕府の
家臣団にその禄高に応じて割り当てる業務を行っ
ていましたが、やがて旗本などに金融も行うよう
になり、莫大な財産を築きあげました。彼らの吉
原などでの豪遊ぶりが、エピソードとして残って
います。

後者の商人米は、下り米問屋（上方米を扱
う）・関東米穀三組問屋（東北関東の米を扱う）
そして地廻り米穀問屋（同じく東北関東の米を扱
う）などが取扱っていました。

問屋に集められた米は、仲買商人の手を経て市
中の舂米屋つきによって精米され庶民に販売されまし
た（舂米屋は展示室にあります）。

深川には掘割りを利用して各藩の蔵屋敷などが
ありましたが、やがて幕末に近い頃から米商人が
深川に本拠地を移して営業するようになり、倉庫
としての役割から取引の拠点へと成長します。そ
して明治19年（1886）には、深川正米市場が深川
佐賀町に開設されました。現在の食糧ビルは昭和3
年（1928）に建設されましたが、ここが正米市場
の本拠地です。また三井・三菱・渋沢などの財閥
系の米穀倉庫もでき、米流通の中心地となりました。

深川の干鰯場

名 称	成立年代	所在地（現住所）
銚子場	元禄9年(1696)	白河1付近 現区立白河小学校周辺
永代場	元禄13年(1700)	佐賀2-9付近 旧西永代町
元 場	宝永6年(1706)	佐賀1-16、17付近 旧小松町
江川場	享保20年(1735)	冬木8、9、10、11付近 旧和倉町



江川場売手中奉納の狛犬（富岡八幡宮）

(2) 干鰯の流通

房総地方で捕れた鰯は畑の肥料として江戸時代
には欠かせないものでしたが、その集散地が深川
にあり、総称して干鰯場といわれました。

左下の表は干鰯場の一覧ですが、元禄から享保
年間という、農村でも商品作物（販売を前提とし
て栽培された作物）が作られはじめた頃で、干鰯
の需要も伸びていった時期と一致します。

干鰯場は銚子場と江川場をあわせて銚子場組、
永代場と元場をあわせて永代場組と呼ばれ、それ
ぞれ干鰯商人によって運営されていました。開設
当初は日本橋周辺の干鰯商人が中心でしたが、幕
末に近い時期から深川で営業する新興商人が台頭
し、干鰯場運営の中核になっていきました。

4 終わりに

江戸の「川向こう」とよばれた深川は、「蔵の街」
として発展しましたが、江戸末期には流通の拠点
として成長しました。これは現在でも同様に深川
の地域的特徴としてあげられます。

こうした歴史のなかで、深川には材木や米など
の大問屋の主人や仲買い商、裏長屋に住んで天秤
棒をかついで売り歩く「棒手振り」商人、大店の
奉公人、さらに職人などとさまざまな人が住み、
流通物資が全国から集まり周辺地域と密接に関わ
りながら発展する活気ある町となりました。